

# 葛の葉狐

楠山正雄

青空文庫



むかし、せつつのくに撰津国の阿倍野あべのという所ところに、阿倍あべの保名やすなという侍さむらいが  
 住すんでおりました。この人の何代なんだいか前まえの先祖せんぞは阿倍あべの仲麻呂なかまろと  
 いう名なだか高い学がくしや者しやで、シナへ渡わたつて、向むここの学がくしや者しやたちの中なかに  
 交まじつてもちつとも引ひけをとらなかつた人ひとです。それでシナの天子てんし  
 さまが日にっほん本ほんへ還かえすことを惜おしがつて、むりやり引ひき止とめたため  
 日にっほん本ほんへ歸かえることができないで、そのまま向むここので、一しやうく生く暮くらし  
 てしまいました。仲麻呂なかまろが死しんでからは、日にっほん本ほんに残のこつた子孫しそんも  
 代だ々だ田舎いななかにうずもれて、田舎侍いななかざむらいになつてしまいました。仲な

麻呂かまろの代だいから伝つたえた天文てんもんや数学すうがくのむずかしい書物しょもつだけは家いえに残のこつていますが、だれもそれを讀よむものがないので、もう何百なん年ねんという間あいだ、古い箱はこの中にしまひ込まれたまま、虫むしの食くうにまかしてありました。保名やすなはそれを殘念ざんねんなことに思おもつて、どうかして先祖せんぞの仲麻呂なかまろのような学者がくしやになつて、阿倍あべの家いえを興おこしたいと思おもいましたが、子供こどもの時ときから馬うまに乗のつたり弓ゆみを射いたりすることはよくできても、学問がくもんで身みを立てることは思おもいもよらないので、せめてりつぱな子供こどもを生うんで、その子こを先祖せんぞに負まけないえらい学が者くしやに仕立したてたいと思おもい立ちました。そこで、ついお隣となりの和泉いずみの国くにの信田しのだの森もりの明神みょうじんのお社やしろに月詣つきまいりをして、どうぞりつぱな子供こどもを一人ひとりお授さずけ下さいましと、熱心ねっしんにお祈いのりをしていま

した。

ある年の秋の半ばのことでした。保名は五六人の家来を連れて、  
 信田の明神の参詣に出かけました。いつものとおりに祈り  
 をすましてしましますと、折からはぎやすすきの咲き乱れた秋の  
 野の美しい景色をながめながら、保名主従はしばらくそこに  
 休んで、幕張りの中でお酒盛りをはじめました。

そのうちだんだん日が傾きかけて、短い秋の日は暮れそうにな  
 りました。保名主従はそろそろ帰り支度をはじめますと、ふ  
 と向こうの森の奥で大ぜいわいわいさわぐ声がしました。その中  
 には太鼓だのほら貝だのの音も交つて、まるで戦争のようなさ  
 わぎが、だんだんとこちらの方に近づいて来ました。主従は

何事なにごとがはじまったのかと思おもつて思おもわず立ちかけますと、その時ときすぐ前まえの草叢くさむらの中で、「こんこん。」と悲かなしそうに鳴なく声こえが聞きこえました。そして若わかい牝狐めぎつねが一匹びき、中なかから風かせのように飛とんで来きました。「おや。」という間まもなく、狐きつねは保名やすなの幕まくの中に飛とび込こんで来きました。そして保名やすなの足あしの下したで首くびをうなだれ、しつぽを振ふつて、さも悲かなしそうにまた鳴なきました。それは人ひとに追おわれて逃にげ場ばを失うした狐きつねが、ほかの慈悲じひぶか深い人にんげん間の助たすけを求もとめているのだというこことはすぐ分わかりました。保名やすなは情なさけ深ぶかい侍さむらいでしたから、かわいそうに思おもつて、家来けらいにかつがせた箱はこの中なかに狐きつねを入れて、かかまつてやりまました。すると間まもなく、「うおつうおつ。」といいうやかましい鬨ときの声こえをあげて、何なん十にん人にんとない侍さむらいが、森もりの中なかから駆か

け出して来きました。そしていきなり保名やすなの幕まくの中にばらばらと飛とび込こんで来きて、物ものもいわずにそこらを探さがし回まわりました。

この乱暴らんぼうなしわざを見て、保名やすなはかつと腹はらを立てて、

「あなたはだれです。断ことわりもなく、出だし抜ぬけに人の幕まくの中はいに入いつて来るくのは、乱暴らんぼうではありませんか。」

とどがめました。

「生なま意まい氣きをいいうな。我われわれ々れがせつかく見みつけた狐きつねが、この幕まくの中ちに逃にげ込こんだから探さがすのだ。早はやく狐きつねを出だせ。」

とその中の頭かしらぶん分ぶんらしい侍さむらいがいました。それから一ふた言こと三み言こといい合あったと思おもうと、乱暴らんぼうな侍さむらい共どもはいきなり刀かたなを抜ぬいて切きつてかかりました。保名やすなも家来けらいたちもみんな強つよい侍さむらいでしたから、

負けずに防ぎ戦つて、とうとう乱暴な侍共を残らず追い払  
つてしまいました。そして箱の中にかくしておいた狐をさつそく  
出して、その間に逃がしてやりました。狐はまるで人間が手を  
合わせて拜むような形をして、二三度拜んだと思うと、さもうれ  
しそうにしつぽを振つて、草叢の中へ逃げて行つてしまいまし  
た。

狐の姿が見えなくなつたと思うと、また向こうの森の中で、先  
よりも三倍も四倍もさわがしい人声がありました。保名が驚いて  
振り返つて見るひまもなく、すぐ目の前に一人、りっぱな馬に乗  
つた大將らしい侍を先に立てて、こんどは何百人という侍が、  
一塊になつて寄せて来て、保名主従を取り囲みました。



そこで又またはげしい戦いくさがはじまりました。保名主従やすなしゆじゆうは幾いくら強つよくつても、先刻せんこくの働はたらきでずいぶん疲つかれている上に、百倍ばいもある敵てきに囲かこまれていることですから、とても敵かないようがありません。保やすなけらいの家来のこは残のこらず討うたれて、保名やすなも体からだ中ただじゆう刀かたなきず傷やきずや矢傷やきずを負おつた上に、大ぜいてあしに手足てあしをつかまえられて、虜とりこにされてしまいました。

この馬うまに乗のつた大將たいしょうは、やはりお隣となりの河内国かわちのくにに住すんでいいしかわあくうえもんいしる石川悪右衛門さむらいという侍さむらいでした。奥方おくがたがこのごろ重おもい病やまいにかかつて、いろいろの医者いしやに見みせても少すこしも薬くすりの効きき目めが見みえないものですから、ちやうど自分じぶんのにいさんが芦屋あしやの道満どうまんといつて、その時分じぶん名高なだかい学がくしや者しやで、天子てんしさま様のおそばに仕つかえて、天文てんもんや

うらな 占いでは日本一の名人という評判だつたのを幸い、ある  
 とまあくうえもん 時悪右衛門は道満に頼んで、来て見てもらいまずと、奥方の  
 びようき 病気はただの薬では治らない、若い牝狐の生き肝を取つてせ  
 んじて飲ませるよりほかにないということでした。そこで信田の  
 もり 森へ大ぜい家来を連れて狐狩りに来たのでした。けれども運  
 る 悪く、一日森の中を駆け回つても一匹の獲物もありません。す  
 っかりかんしやくをおこしてぶんぶんしながら引き上げようとし  
 ますと、ひよっこり、親子三匹の狐が長いすすきの陰にかくれて  
 いるのを見つけました。大喜びでさつそく大ぜいかかります  
 きつねおどろ と、狐は驚いて、牝牡の狐はどうとう逃げてしまいましたが、  
 わか 小狐が一匹逃げ場を失つて、大ぜいに追われながら、

すばやく保名やすなの幕まくの中まで逃げ込んだのでした。

こうしてせつかく手てに入れかけた狐きつねを横合よこあいから取とられてしまつたのですから、悪右衛門あくうえもんはくやしがつて、やたらに保名やすなを憎にくみました。そして生いけ捕とつたまま保名やすなを殺ころしてしまおうとしますと、ふいに向むこうから、

「もしもし、しばらくお待ちなさい。」

という声こえが聞きこえました。

悪右衛門あくうえもんが驚おどろいて振ふり返かえると、それは同じおな河内国かわちのくにの藤井寺ふじいでらというお寺てらの和尚おしょうさんでした。そのお寺てらは石川いしかわの家代いえだ々の菩提所ぼだいしよで、和尚おしょうさんとは平生へいぜいから大そう懇意こんいな間柄あいだがらでした。

「これはめずらしい所でお目にかかりました。どういふわけで、その男を殺そうとなさるのです。」

と和尚さんはたずねました。

悪右衛門はそこで、今日の狐狩りの次第をのべて、とうとう

おしまいに保名にじやまをされて、くやしくつてくやしくつてた

まらないという話をしました。

和尚さんは、静かに話を聞いた後で、

「なるほど、それはお腹の立つのはごもつともです。けれども人の命を取るというのは容易なことではありません。殊に大切な御病人の命を助けようとしておいでの時、ほかの人間の命を取るといふのは、仏さまのおぼしめしにもかなわないうでしょう。」

そうすると、せつかく助かる御病人が、かえつて助からなくなるまいものでもない。」

こう和尚さんにいわれると、さすがに傲慢な悪右衛門も、少し勇気がくじけました。和尚さんはここぞと、

「しかし、ただ助けるといのが業腹にお思いなら、こうしましょう。この男を今日から侍をやめさせて、わたしの弟子にして、出家させます。それで堪忍しておやりなさい。」

といいました。

悪右衛門もとうとう和尚さんに言い伏せられて、いったん虜にした保名を放してやりました。

やがて悪右衛門の主従は和尚さんに別れを告げて、また

森もりの中なかにすつかり姿すがたが見みえなくなりますと、和尚おしょうさんは、その時ときまで、ぼんやり夢ゆめをみたように座すわっていた保名やすなに向むかつて、「さあ、乱暴者らんぼうものどもが行らつてしまいました。また見みつからないうちに、そつと向むこうの道みちを通とおつて逃にげていらつしやい。わたくしはさつきあなたに助たすけて頂いただ、この森もりの狐きつねです。御恩ごおんは一生いっしようわすれませぬ。」

こういうが早はやいか、和尚おしょうさんはもうまた元もとの狐きつねの姿すがたになつて、しつぽを振ふりながら、悪右衛門あくうえもんたちが帰かえつていった方ほう角かくとは違ちがつた向むこうの森もりの中なかの道みちへ入はいつていきました。それはさも、自分じぶんについて来こいというようでした。保名やすなはいよいよ夢ゆめの中なかで夢ゆめを見みたような心こころ持もちがしなから、うかうかとその後あとについていきま

した。

二

もう日がとつぷり暮れて、夜になりました。暗い樹の間から、吹けば飛びそうに薄い三日月がきらきらと光って見えていました。保名はいつの間にか狐の行方を見失ってしまつて、心細く思いながら、森の中の道をとぼとぼと歩いて行きました。しばらく行くと、やがて森が尽きて、山と山との間の、谷あいのような所へ出ました。体中にうけた傷がずきんずきん痛みますし、もう疲れきつてのどが渴いてたまりませんので、水があるかと思

ったにて谷へずんずん下りおりていきますと、はるかの谷底たにぞこに一ひとすじ、  
 白ぬのい布をのべたような清水しみずが流ながれていて、月つきの光ひかりがほのかに当あ  
 っやすなていました。その光ひかりの中なかにかすかに人らしい姿すがたが見みえたので、  
 保名やすなはほつとして、痛いたむ足あしをひきずりひきずり、岩いわかど角かどをたどつ  
 て下おりて行いきますと、それはこんな寂さびしい谷たにあいに似にもつかない  
 十六七おとめのかわいらしい少女おとめが、谷川たにがわで着物きものを洗あらっているのだし  
 た。少女おとめは保名やすなの姿すがたを見みるとびつくりして、危あやうく踏ふまえていた  
 岩いわを踏ふみはずしそうにしました。それから保名やすなの血ちだらけになつ  
 た手足てあしと、ぼろぼろに裂さけた着物きものと、それに何なによりも死人しにんのよう  
 に青あおざめた顔かおを見みると、思おもわずあつとさけび声こゑをたてました。保  
 名やすなは気きの毒どくそうに、



「驚おどろいてはいけません。わたしはけっして怪あやしいものではありません。大ぜいの悪わるもの者に追おわれて、こんなにけがをしたのです。どうぞ水みずを一杯飲のませて下さい。のどが渴かわいて、苦くるしくつてたまりません。」

「といいました。」

娘むすめはそう聞きくと大たいそう気きの毒どくがって、谷川たにがわの水みずをしゃくつて、保名やすなに飲のませてやりました。そしてそのみじめらしい様子ようすをつくづくとながめながら、

「まあ、そんな痛いた々いたしい御様子ごようすでは、これからどこへいらつしやろうといつても、途とちゆう中ちゆうで歩あるけなくなるにきまっています。むさくるしい家いえで、おいやでしようけれど、ともかくわたくしのう

ちへいらしつて、傷のお手当をなさいますし。」

といいました。

保名は大そうよろこんで、娘の後についてその家へ行きました。

それは山の陰になった寂しい所で、うちには娘のほかになれも人

はおりませんでした。この娘は親も兄 弟もない、ほんとうの

一人ぼつちで、この寂しい森の奥に住んでいるのでした。

その明るる日保名は目が覚めてみると、昨日うけた体の傷が一

晩のうちにはひどい熱をもつて、はれ上がっていました。体

中、もうそれは搾木にかけられたようにぎりぎり痛んで、立つ

ことも座することもできません。そこで保名は心のうちには気の毒

に思いながら、毎日あおむけになつて寝たまま、親切な娘の

世話せわに体からだをまかしておくほかはありませんでした。

保名やすなの体からだが元もとどおりになるにはなかなか手間てまがかかりました。

娘むすめはそれでも、毎日まいにちちつとも飽あきずに、親身しんみの兄きょうだい弟だいの世話せわ

をするように親切しんせつに世話せわをしました。保名やすなの体からだがすつかりよく

なつて、立つたつて外そとへ出歩で歩くことができるようになつた時分じぶんには、

もうとうに秋あきは過すぎて、冬ふゆの半なかばになりました。森もりの奥おくの住すまい

には、毎日まいにち日木こ枯がらしが吹ふいて、木この葉はも落おちつくすと、やがて

深ふかい雪ゆきが森もりをも谷たにをもうずめつくすようになりました。保名やすなはそ

のままいつしよに雪ゆきの中なかにうずめられて、森もりを出でることができな

いでいました。そのうち雪ゆきがそろそろ解とけはじめ、時々ときどきは森もり

の中なかに小鳥こどりの声こゑが聞きこえるようになって、春はるが近ちかづいてきました。

やすな 保名は毎日親切な娘の世話になつていゝうち、だんだんうち  
 のことを忘れるようになりまして。それからまた一年たつて、二  
 度めの春が訪れてくる時分には、保名と娘の間にかわいらしい男  
 の子が一人生まれていました。このごろでは保名はすっかりもと  
 の侍の身分を忘れて、朝早くから日の暮れるまで、家のうしろの  
 小さな畑へ出ては百姓の仕事をしていました。お上さんの  
 葛の葉は、子供の世話をする合間には、機に向かつて、夫や子供  
 の着物を織つていました。夕方になると、保名が畑から抜いて  
 来た新しい野菜や、仕事の合間に森で取った小鳥をぶら下げて帰  
 つて来ますと、葛の葉は子供を抱いてにつこり笑いなから出て来  
 て、夫を迎えました。

こういふ楽しい、平和な月日を送り迎えするうちに、今年は子供がもう七つになりました。それはやはり野面にはぎやすきのみだ。咲き乱れた秋の半ばのことでした。ある日いつものとおりで保名は畑に出て、葛の葉は一人寂しく留守居をしていました。お天気がいいので子供も野へとんぼを取りに行つたまま、遊びほおけていつまでも帰つて来ませんでした。葛の葉はいつものとおりに機に向かつて、とんからりこ、とんからりこ、機を織りながら、少し疲れたので、手を休めて、うつとり庭をながめました。もう薄れかけた秋の夕日の中に、白い菊の花がほのかな香りをたてていました。葛の葉は何となくうるんだ寂しい気持ちになつて、我を忘れてうつかりと魂が抜け出したようになっていました。その時外か

ら、

「かあちちゃん、かあちちゃん。」

と呼びながら、遊び疲れた子供が駆けて帰って来ました。うつ

とりして、その声にも気がつかなくなかったとみえて、葛の葉が

返事をしないので、不思議に思つて子供はそつと庭に入つてみま

すと、いつものように機に向かっている母親の姿は見えました

が、機を織る手は休めて、機の上につつぷしたまま、うとうとう

たた寝をしていました。ふと見るとその顔は、人間ではなくつ

て、たしかに狐の顔でした。子供はびっくりして、もう一度見直

しました。やはりまぎれもない狐の顔でした。子供は「きやつ

。」と、思わずけたたましいさけび声を上げたなり、あとをも見

ずに外へ駆け出しました。

子供のさけび声に、はつとして葛の葉は目を覚ましました。そしてちよいとうたた寝をした間に、どういうことが起こったか、残らず知ってしまいました。ほんとうにこの葛の葉は人間の女ではなくって、あの時保名に助けられた若い牝狐だったのです。狐は今日までかくしていた自分の醜い、ほんとうの姿を子供に見られたことを、死ぬほどはずかしくも、悲しくも思いました。

「もうどうしても、このままこうしていることはできない。」

こう葛の葉はいつて、はらはらと涙をこぼしました。

そういいながら、八年の間なれ親しんだ保名にも、子供にも、

この住いにも、別れるのがこの上なくつらいことに思われました。

さんざん泣いたあとで、葛の葉は立ち上がって、その障子の  
上に、

「恋しくば

たずね来てみよ、

和泉なる

しのだの森の

うらみ葛の葉。」

とこう書いて、またしばらく泣きくずれました。そしてやっと  
思いきって立ち上がると、またなごり惜しそうに振り返り、振り  
返り、さんざん手間をとった後で、ふいとどこかへ出て行ってし  
まいました。



もう日が暮れかけていました。保名は子供を連れて畑から帰つて来ました。母親の変わった姿を見てびっくりした子供は、泣きながら方々父親のいる所を探し歩いて、やっと見つけると、いまがたみ父親のいる所を探し歩いて、やっと見つけると、今し方見たふしぎを父親に話したのです。保名は驚いて、子供を連れて、あわてて帰つて来てみると、とんからりこ、とんからりこ、いつもの機の音が聞こえないで、うちの中はひっそりと、静まり返っていました。うち中たずね回つても、裏から表へと探し回つても、もうどこにも葛の葉の姿は見えませんでした。そしてもう暮れ方の薄明りの中に、くつきり白く浮き出している障子のの上に、よく見ると、字が書いてありました。

「恋しくば

たずね来てみよ、

和泉いずみなる

しのだの森もりの

うらみ葛くずの葉は。」

母親ははおやがほんとうにいなくなつたことを知しつて、子供こどもはどんなに悲かなしんだでしょう。

「かあちゃん、かあちゃん、どこへ行つたの。もうけつして悪わるいことはしませんから、早くはや帰かえつて来きて下ください。」

こういいながら、子供こどもはいつまでもやみの中なかを探さがし回まわつていました。さつき顔かおの変かわつたのに驚おどろいて声こえを立てたたので、母親ははおやがおこつて行いつてしまつたのだと思おもつて、よけい悲かなしくなりました。

狐きつねのかあさんでも、化け物ばけもののかあさんでもかまわない、どうして  
 もかあさんに会あいたたいといつて、子供こどもはききませんでした。

あんまり子供こどもが泣なくので、保名やすなは困こまつて、子供こどもの手てを引ひいて、  
 当あてもなく真まつ暗くらやみの森もりの中なかを探さがして歩あるきました。とうとう  
 信田しのだの森もりまで来くると、とうに夜中よなかを過すぎていました。けつして二  
 度どと姿すがたを見みせまいと心こころに誓ちかつていた葛くずの葉はも、子供こどもの泣なき声こえにひ  
 かれて、もう一度どくさ草くさむらの中に姿すがたを現あらわしました。子供こどもはよろこん  
 で、あわてて取とりすがろうとしましたが、いったん元もとの狐きつねに返かえつ  
 た葛くずの葉はは、もう元もとの人にんげんの女むすめではありませんでした。  
 「わたしの体からだにさわつてはいけません。いったん元もとの住すみかに帰かえ  
 つては、人にんげん間まとの縁えんは切きれてしまったのです。」

と葛の葉狐くずはぎつねはいいました。

「お前まえが狐きつねであろうと何なんであろうと、子供こどものためにも、せめてこの子が十になるまでも、元もとのよう。にいつしよ。にいてくれないか

と保名やすなはいいました。

「十まではおろか一いっしょう生せいでも、この子のそばにいたいのですけれど、わたしはもう二度どと人間にんげんの世界せかいに帰かえることのできない身みになりました。これを形見かたみに残のこしておきますから、いつまでもわたしを忘れわすずにいて下ください。」

こういつて葛くずの葉狐はぎつねは一寸すん四方ほうぐらいの金きんの箱はこと、水すい晶しょうのような透すき通とおつた白たまい玉たまを保名やすなに渡わたしました。

「この箱はこの中はこに入はいっているのは、竜宮りゅうぐうのふしぎな護符ごふです。これを持もつていれば、天地てんちのことも人間界にんげんかいのことも残のこらず目に見みるように知しることができません。それからこの玉たまを耳みみに当あてれば、とりけもの鳥獸とりけものの言葉ことばでも、草木くさきや石いしころの言葉ことばでも、手てに取るように分わかります。この二つの宝たからもの物ものを子供こどもにやって、日本にっぽん一の賢かしこい人ひとにして下ください。」

「といって、二つの品物しなものを保名やすなに渡わたしますと、そのまますうつと狐きつねの姿すがたはやみの中に消きえてしまいました。」

きつね 狐のふしぎな 宝物を授かったせいでしようか、狐の子供の  
 あべ 阿倍の童子は、並の子供と違って、生まれつき大そう賢くて、八  
 つになると、ずんずんむずかしい本を読みはじめ、阿倍の家に昔  
 から伝わって、だれも読む者のなかつた天文、数学の巻き物  
 から、占いや医学の本まで、何ということなしにみな読んでしま  
 っで、もう十三の年には、日本中でだれもかなうもののない  
 ほどの学者になつてしまいました。

するとある日のことでした。童子はいつものとおり一間に入っ  
 て、天文の本をしきりに読んでいますと、すぐ前の庭の柿の木  
 に、からすが二羽、かあかあいつて飛んで来ました。そして何か  
 がちやがちやおしやべりをはじめました。何をからすはいつてい

るのか知らんと思つて、童子は例のふしぎな玉を耳に当てますと、このからすは東の方から来た関東のからすと、西の方から来た京都のからすでした。京都のからすは関東のからすに向かつて、このごろ都で見えて来た話をしました。

「都の御所では、天子さまが大<sup>たい</sup>病<sup>びょう</sup>で、大<sup>たい</sup>そう<sup>そう</sup>な<sup>な</sup>さ<sup>さ</sup>わ<sup>わ</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>を<sup>を</sup>して<sup>して</sup>いるよ。お医者<sup>いしや</sup>と<sup>と</sup>いう<sup>いう</sup>お<sup>お</sup>医<sup>い</sup>者<sup>しや</sup>、<sup>ぎ</sup>や<sup>や</sup>う<sup>う</sup>じ<sup>じ</sup>や<sup>や</sup>行<sup>ぎ</sup>者<sup>じや</sup>と<sup>と</sup>いう<sup>いう</sup>行<sup>ぎ</sup>者<sup>じや</sup>を<sup>を</sup>集<sup>あ</sup>め<sup>め</sup>て、いろいろ手をつくして療<sup>り</sup>治<sup>り</sup>を<sup>を</sup>したり、祈<sup>き</sup>禱<sup>とう</sup>を<sup>を</sup>したりしているが、一向<sup>いっこう</sup>にしる<sup>し</sup>る<sup>る</sup>し<sup>し</sup>が<sup>が</sup>見<sup>み</sup>え<sup>え</sup>な<sup>な</sup>い。それ<sup>それ</sup>は<sup>は</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>は<sup>は</sup>ず<sup>ず</sup>さ、あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>は<sup>は</sup>病<sup>び</sup>氣<sup>き</sup>で<sup>で</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>ん<sup>ん</sup>だ<sup>だ</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>あ。だ<sup>だ</sup>が<sup>が</sup>わ<sup>わ</sup>た<sup>た</sup>し<sup>し</sup>は<sup>は</sup>知<sup>し</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>る。」

「じゃあどうい<sup>い</sup>う<sup>う</sup>わ<sup>わ</sup>け<sup>け</sup>な<sup>な</sup>ん<sup>ん</sup>だ<sup>だ</sup>ね。」  
と<sup>と</sup>関<sup>かん</sup>東<sup>とう</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>す<sup>す</sup>は<sup>は</sup>た<sup>た</sup>ず<sup>ず</sup>ね<sup>ね</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>た。

「それはこういうわけさ。このごろ御所の建て替えをやつて、天子さまのお休みになる御殿の柱を立てた時に、大工がそそつかしく、東北の隅の柱の下に蛇と蛙を生き埋めにしてしまったのだ。それが土台石の下で、今だに生きていて、夜も昼もにらみ合つて戦つている。蛇と蛙がおこつて吹き出す息が炎になつて、空まで立ちのぼると、こんどは天が乱れる。その勢いで天子さまの体にお病がおこるのだ。だからあの蛇と蛙を追い出してしまわないうちは、御病氣は治りつこないのだよ。」

「ふん、それじゃあ人間になんか分からないはずだなあ。」

そこで京都のからすは、関東のからすと顔を見合せて、あざけるように、かあかあと笑いました。そしてまた関東のか



らすは東へ、京都のからすは西へ、別れて飛んでいってしましました。

からの言葉を聞いて、童子は早速占いを立ててみると、なるほどからのいったとおりに違いありませんでしたから、おとうさんの前へ出て、その話をして、

「どうか、わたしを京都へ連れて行って下さい。天子さまの御病気を治して上げとうございます。」

といいました。

保名もこれをしおに京都へ行つて、阿倍の家を興す時が来たと、大そうよろこんで、童子を連れて京都へ上りました。そして天子さまの御所に上がつて、お願いの筋を申し上げました。天

子さまも阿倍の仲麻呂の子孫だということをお聞きになつて、お  
 よろこびになり、保名親子の願いをお聞き届けになりました。そ  
 こで童子はからすに聞いたとおりに占いを立てて申し上げました。  
 御所の役人たちはふしぎに思つて、なかなか信用しませんで  
 したが、何しろ困りきつてるところでしたから、ためしに御  
 寝所の東北の柱の下を掘らしてみますと、なるほど童子のい  
 ったとおり、火のような息をはきかけはきかけ戦つてゐる蛇と蛙  
 を見つけて、追い出して、捨てました。するとまもなく天子さま  
 の御病氣は薄紙をへぐように、きれいに治つてしまいました。  
 天子さまは大そう阿倍の童子の手柄をおほめになつて、ちよう  
 ど三月の清明の季節なので、名前を阿倍の清明とおつけにな

り、五位いくらいの位いさずを授けて、陰陽おんみよう頭のかみという役やくにおとりたてになりました。後のちに清明せいめいの清せいの字じをかえて、阿倍あべの晴明せいめいといった名な高たかい占うらないの名めいじん人はこの童子どうじのことです。

## 四

たった十三なにしかならない阿倍あべの童子どうじが、天子てんしさまの御病氣ごびようきを治なしてえらい役やく人にんにとりたてられたと聞きいて、いちばんくやしいしかわあくうえもんがったのは、あの石川いしかわ悪右衛門あくうえもんのいいさんのあしや芦屋あしやのどうまん道満どうまんであした。道満どうまんはその時ときまで日本にっぽん一の学がく者しやで、天文てんもんと占うらないの名めいじん人にんという評判ひようばんであしたが、こんどは天子てんしさまの御病氣ごびようきを

治すことができないで、その手柄を子供に取られてしまったので  
 すから、くやしがるのも無理はありません。そこで御所へ上がつ  
 て天子さまに讒言をしました。

「御用心遊ばさないといけません。あの童子は詐欺師でござい  
 ます。恐れながら、陛下のお病は侍医の方々や、わたくし共の丹  
 誠で、もうそろそろ御平癒になる時になっておりました。そこ  
 へ折よく童子めが来合わせて、横合いから手柄を奪っていったの  
 でございます。御寝所の下の蛇と蛙のふしぎも、あれら親子が  
 御所の役人のだれかとしめし合わせて、わざわざ入れて置いた  
 ものかも知れませぬ。どうか軽々しくお信じなさらずに、一度  
 わたくしと法術比べをさせて頂きとうございます。もしあの

童子どうじが負けまましたらば、それこそ詐欺師さぎしの証拠しょうこでございませうか  
ら、さつそく位くらいを取り上げて、追おい返かえして頂いただきとうございませう。

と申もうし上げあました。

「でもお前まえがもし童子どうじに負けまたらどうするか。」

と天子てんしさまは少すこしおこつて、おたずねになりました。

「はい、万々まんまん一いちわたくしが負けまるようなことがございしたら、

それこそわたくしの頂いただいておりますお役やくも位くらいも残のこらずお返かえし申もうし  
上げて、わたくしは童子どうじの弟子でしになつて、修しゆぎ業ぎようをいたします

。」

と、高慢こうまんな顔かおをしてお答こたえ申もうし上げあげました。

そこで天子てんしさまは阿倍あべの晴明せいめい親子おやこをお呼よび出だしになり、御前ごぜん

で術比じゆぢらべきさせてごらんになることになりました。道満どうまんと清明せいめいが右みぎひだり左わかに別れて席せきにつきますと、やがて役人やくにんが四五人にんかかつて、重おもそうに大きな長持ながもちを担かついで来て、そこへすえました。「道満どうまん、清明せいめい、この長持ながもちの中には何なにが入はいっているか、当あててみよ、という陛下へいかの仰おおせです。」

とお役人やくにんの頭かしらが良かったです。

すると道満どうまんは、さもとくいらしい顔かおをして、

「清明せいめい、まずお前まえからいうがいい。子供こどものことだ、先さきを譲ゆずつてやる。」

といいました。清明せいめいはその時とき、丁寧ていねいに頭あたまを下さげて、

「では失礼しつれいですが、わたくしから申もうし上げましょう。長持ながもちの

中にお入れになつたのは猫二匹です。」

といいました。

晴明せいめいがうまくいいあてたので、道満どうまんはぎよつとしました。

「ふん、まぐれ当たりあに当たつたな。いかにも二匹ひきの猫ねこに相違そういありません。それで一匹びきは赤猫あかねこ、一匹びきは白猫しろねこです。」

長持ながもちのふたをあけると、なるほど赤あかと白ねこの猫ねこが二匹ひきと飛び出だしました。天子てんしさまも役やく人にんたちも舌したをまいて驚おどろきました。

今いまのは勝負しょうぶなしにすんだので、又また、四五人にんのお役やく人にんが、大きなお三方さんぼうに何か載のせて、その上に厚あつい布ぬのをかけて運はこんで来きました。道満どうまんはそれを見みると、こんどこそ晴明せいめいに先せんをこされま  
いというので、いきり立たつて、

「ではわたくしから申し上げます。お三方さんぼうの上にお載のせになつたのは、みかん十五です。」

といいました。

晴明せいめいはそれを聞いて、「ふん。」と心こころの中であざ笑わらいました。そして少すこしいたずらをして、高慢こうまんらしい道満どうまんの鼻はなをあかせてやりたいと思おもいました。そこでそつと物ものを換かえる術じゆつを使つかつて、お三方さんぼうの中の品物しなものを素早すばやく換かえてしまいました。そしてすました顔かおをしながら、

「これはみかん十五ではございません。ねずみ十五匹ひきをお入いれになつたと存ぞんじます。」

といいました。天子てんしさまはじめお役人やくにんたちはびつくりしまし



た。こんどこそは晴明せいめいがしくじったと思おもいました。そばについでいたおとうさんの保名やすなも真まつ青さおになつて、息子むすこのそでを引ひきました。けれども晴明せいめいはあくまで平気へいきな顔かおをしていました。道どうま満まんは真まつ赤かになつて、

「さあ、詐欺師さぎしの証拠しょうこは現あらわれましたぞ。中なを早はやくおあけなさい、早はやく。」

とさげびました。

お役人やくにんはお三方さんぼうの覆おおいをとりました。するとどうでしょう。お三方さんぼうの上うへに載のせたのはみかんではなくつて、今いま今いままで晴明せいめいのほかだれ一人ひとり思おもいもかけなかつたねずみが十五匹ひき、ちよろちよろ飛とび出だして、御殿ごてんの床ゆかの上うへを駆かけ歩あるきました。すると長ながも

持ちの上に寝ねていた二匹ひきの猫ねこが目早めばやく見みつけて、いきなり飛とび下おりて、ねずみを追おい回まわしました。みんなは「あれあれ。」とさけんで、総立そうだちになつて、やがて御殿中ごてんじゆうの大きおおきわぎになりました。これで勝しょう負ぶはつきました。芦屋あしやの道満どうまんは位くらいと取り上あげられて、御殿ごてんから追おい出だされました。そして阿倍あべの晴明せいめいのお弟子でしになりました。

# 青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年9月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 葛の葉狐

楠山正雄

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>